

写真の標石に「妙満寺跡」の四字が刻まれているが、顕本法華宗總本山妙満寺は現在左京区岩倉幡枝町にあり、尾州藩医宗浅井家の医祖三代、延齋、草春、周伯の墓があったが無縁となっていた。国幹顕彰会が昭和五十二年に新しく墓地を造設した。本書の三版出版のときは浅井家三代の墓を追補して頂きたいものである。その由来については、『漢方の臨床』第三十九巻一号「温知荘雑筆」に詳記した。

増補(26) 反骨の人・太田典礼

本書の中、只一人現代の人である。墓標に生前自筆の「本来靈魂なし墓は歴史の証」とのみ刻まれている。昭和四十七年二月、太田氏が理事長の(財)日本古医学資料センター創立のとき、小川鼎三、大島蘭三郎、緒方富雄各氏と共に大塚敬節氏と筆者も理事に就任し、度々理事会に出席し、昭和四十八年十一月、安政版『医心方』の復刻と和訓解説書出版に協力したことがある。まさに話題に富む反骨の人であった。

(矢数 道明)

(思文閣、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五—七五一
—一七八一、平成三年十二月、A5判・三七八頁、定価三〇九〇円)

君塚美恵子編『紀州藩医 泰淵の日記』

躍動的でリアルな史料群に出会いたい、という想いは研究者全ての願いではなからうか。私のように特別な史料群を持

たずに研究を行っていると、時々一抹の寂しさと物足りなさを感じ、そんな想いに陥る。今回紹介する『紀州藩医 泰淵の日記』は、そんな想いを晴らしてくれた一書であった。

本書は、日記の著者泰淵の経歴や家系もはっきりしているので、必要以上の予備調査もしなくて済み、直接研究テーマに取り組む事ができる。そんな点からも素晴らしい史料である。ではまず、筆者「泰淵」について整理しておこう。

筆者—中村泰淵真貫(寛政九、一七九七—安政六、一八五九。六十三歳)。

系譜—町医師山口流謙秀安二男。養子(天保二、一八三一、三十五歳)。中村家四代目・本道内科。

役職の経歴—紀州藩江戸詰め医師。小普請医師(天保二、一八三一)、奥医師(天保十、一八三九)、地廻りお供(御匙医同様、弘化元、一八四四)、御匙医格(嘉永四、一八五二)。

趣味—和歌・漢詩

在職中の藩主—十代治宝・十一代斉順・十二代斉疆・十三代慶福(幼名菊千代、のち十四代將軍家茂)の四代。

江戸の屋敷—柴田玄岱方、四ツ谷仲町
本書は次の三つの部分から構成されている。

①日記：江戸から和歌山への道中日記・和歌山での勤務日記・日光参詣予参の随行日記。これは天保十一年(一八四〇)三月二十九日から同十四年(一八三三)四月二十三日までの四年間、四六二日分の日記である。

②関係文書編：辞令・薬の注文書・手紙等八点の影印。

③医療編：十一代藩主斉順病状概要・処方の実際・コレラ（溼瀉病）の家庭療法・漢方薬索引

日記の部分を今少し詳しく述べると、月日、天候、旅の日程、勤務・面会者・診療者・投与の薬名等の一日の出来事が淡々と書かれている。医史学から注目すると、和歌山での勤務日記（五七―二三五頁）の部分は、藩主の診察や病状概要、出勤・帰宅の時間、宿・日直が書かれているので、藩医の活動が良くうかがえる。当時の藩医の勤務には、医療活動以外に藩公とのお供（釣り・船遊び・鷹狩り・花火など）や行事の陪席が含まれていた。そんな所から人間関係が育まれたと思われる。私なら、医療活動だけでも大変なのでそれ以外は心労とを感じるが、当時はのんびりとし人情味もあり名誉と感じたのだろう。

本書は③の医療編だけでも購入する価値は十分である。この編は、藩主斉順の約二か月間の病状（発熱・発汗・戦慄等の表現）と、患者ごとに与えた薬の名と数量がまとめられ、コレラに対する具体的な家庭療法が記され、さらに本書に登場する漢方薬の索引の部分である。しかも、本書はこの編が日記の部分によって補完され、泰淵がその前後に何をしていたのかも知り得て、人間の温もりやリアルさを感じさせてくれるのである。

本書を通して、藩医の勤務振り、匙・奥医師・奥詰医師・番医師・寄合医師・小普請医師が置かれており、江戸幕府の医療制度と比較すると、藩の医療制度もある程度ならついで

ることが確認できた。また、私の興味から言えば、泰淵の治療は内科医であるから基本的には薬を投与しているが、「疝癪のお気味合 お鍼」（二五〇頁）や「夏目 弾正方癩氣^二而鍼療」（二三七頁）とあり癩に鍼施術を行ったり、「発病 柴圭加葛湯 お鍼」（二五〇頁）、「五助方^一見舞鍼療致」（二三七頁）、「彈正方^一見舞鍼療」（同）とあって、鍼と薬の併用療法を行っている。他所にも度々鍼施術の記載も見える。当時は、内科や外科の医師も鍼施術を行っている例もあるので、ここでも再確認できた。ただ、中村家初代寿泰当経が鍼医師として紀州藩に登用された事と考え合わせると一つ疑問が湧いてくる。幕府の制度は、登用された医療科目が原則的に家系の医療科目として踏襲されて行くので、幕府と藩の制度が違うのか、中村家泰淵までの間に転科の申請をしたのであろうか、不明な点である。

江戸時代の医療や藩医の研究には必携の書なので、ぜひ手に取って御覧になることをお勧めする。

（香取 俊光）

〔かのう書房、東京都神田神保町一―五二、電話〇三―三三九一
一八八八、一九九一年、四六判、二六二頁、定価二〇〇〇円〕

諫早医師会編『諫早医史 一九九〇年』

かつて諫早は佐嘉鍋島藩の属領（龍造寺家）であった。二万五千石から一万石に切り詰められたことから分かるように、